



(静岡)

静岡平野は、安倍川の扇状地の発達により形成されているが、その扇状地の東南末端部を、南北に流れる

の範囲は、両遺跡を包括するように東西約〇・五km、南北約一kmとなり、静岡市内では最大規模の遺跡となつた。

神明原遺跡と元宮川遺跡とは、南と北に約五〇〇m離れた別々の遺跡として登録されていたのであるが、最近の分布調査の結果遺跡

- 1 所在地 静岡市水上・西大谷
- 2 調査期間 一九八三年(昭五八)四月～一九八五年三月
- 3 発掘機関 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 4 調査担当者 栗野克己・小嶋日出一・成島 仁
- 5 遺跡の種類 祭祀遺跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

静岡・神明原・元宮川遺跡

大谷川流域に、本遺跡が位置する。遺跡の西側は北から有東遺跡や天神森遺跡から続く微高地が南へのびており、その東縁に接する泥炭層の発達した低地との変遷線に旧大谷川流路が蛇行している。登呂遺跡は本遺跡から西へ約八〇〇mのところであり、前記微高地の西側斜面に立地している。

一方本遺跡の東側には有度山丘陵が広がり、山麓には、駿河国分寺の可能性が指摘されている片山廃寺をはじめ、縄文・弥生の遺跡群や、多くの古墳群が分布している。

神明原・元宮川遺跡の調査は、大谷川の河川改修工事にもなる事前調査である。現在の河道は昭和一七年に行われた、三菱の軍需工場周辺の排水を目的として、蛇行する大谷川を直線的に改修したものだが、その折にかなり破壊されている。朝鮮半島から連れてこられた人達の強制労働により工事が行われたのであるが、ひきつづき翌一八年には、住友のプロペラ工場の造成土の掘削により登呂遺跡が発見されたことは周知のことである。

遺跡は、海拔五～八mの低地にあるが、旧大谷川の両岸に広がる微高地上には弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世にかけての堅穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝・土壇・柵跡・配石遺構・粘土採掘跡など長期間にわたる生活の痕跡が発見されている。弥生時代の丸木舟と櫓はこの遺跡の南端部の砂丘・川状の低地から発見されたもので、有東遺跡に代表される弥生時代中期の活動

範囲の広がりが確認され、注目されている。この遺跡の最大の特徴は旧大谷川の流路跡の発見にはじまる。旧大谷川の流路は現在の景観と異なり、大きく蛇行の跡をみせている他、川幅が一〇〇mあまり、深さ四mあまりに達する箇所もみられる。この旧大谷川の堆積土層からは古墳時代後期から奈良・平安、中世に至る多量の祭祀遺物が発見され、古代から中世にかけて大規模な「水辺での祭り」が行われていたことが確認された。

これらの祭祀遺物群は質・量とも豊富であり、従来律令的祭祀形態の特徴的遺物の一つと考えられていた木製人形などの出現時期が古墳時代後期にまでさかのぼる可能性もでてきた。また、馬に関する資料が非常に多くみられ、馬の骨や馬の形代である土製品や木製品が出土している。人形にも土製品と木製品がみられる。他に斎串・木製鏃・刀や卜骨・鏡・「神」の文字が書かれた土器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁などが発見されている。

木簡はいずれもこの旧大谷川流路から発見された。一号木簡は西大谷二区の流路から発見されたのであるが、この部分では単一の時期に限定されない遺物群が発見されており、伴出遺物による年代観は明確ではない。二号・三号木簡は西大谷三区の流路から発見されたもので、平安時代～中世の遺物が主体であり、下限は一四世紀頃と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「他田里戸主字刀マ真酒」

110.5×17×4.5 051

西大谷二区E四三#一四グリッドの旧大谷川流路内砂礫層から出土した。上端は角型、下端は串状だが先端を切り落としている。側面から裏面にかけて間隔をあけた三本の刃痕による線がみられる。板目板の木表に墨書され、表面は丁寧に削り面調整している。年代は「他田里」とあることから七十五年の郷里制施行以前である。

一〇世紀前半に成立した「倭名類聚抄」によれば、当時の駿河国有度郡には内屋（ウツノヤ）、間壁（マカベ）、他田（オサダ）、新居（ニイ）、託美（タクミ）、嘗見（ナメミ）、会星（アフボシ）の七郷があり、その一つは他田に該当する。「戸主」である「字刀マ」という氏については、『日本書紀』大化二年三月辛巳条の「菟碓人」、天平一〇年「駿河国正税帳」の「有度部黒背」（駿河国安倍軍団少弐）や、『万葉集』巻二〇—四三三七の「有度部牛麻呂」（駿河国上丁・防人）、また平城宮出土木簡の「駿河国有度郡嘗□□□有□□忍万呂有刀部古万呂調堅魚十一斤十兩」などがあり、同氏の関連史料がふえた。

(2) 「南無阿弥□×」

220×22.5×2.5

西大谷四区Q二三グリッド第八トレンチの暗灰色粘土層から出土した。旧大谷川流路内である。板目板の木裏に墨書があり、上端を圭頭状に、下端を尖らせている。一字目は梵字の一尊種子・バアン

「金剛界大日」を表わす文字のくずし字と考えられる。以下「南無阿弥」と思われるが、下の文字がはっきりしない。

(3) 「天定 鬼□
鬼」

174×41×2.5

西大谷四区R二グリッドの旧大谷川流路内から出土した。上端は圭頭状、下端は尖らせている。表面を丁寧に面調整し、板目板の木表に墨書している中世の呪符木簡である。上に「天定」と二文字をおくが「定」の字は「𠄎」の部分のみえるが「𠄎」の部分はいまははっきりしない。その下に「鬼」の字を二文字横にならべて書いている。しかし、全体のバランスからいえば、右側にもう一字あってもよいだろうが、墨痕はみえない。真中の鬼の字の下に一字あるが判読しがたい。

9 関係文献

栗野克己・小嶋日出一『大谷川一』(『静岡埋蔵文化財調査研究所調査報告 第五集』一九八四年)

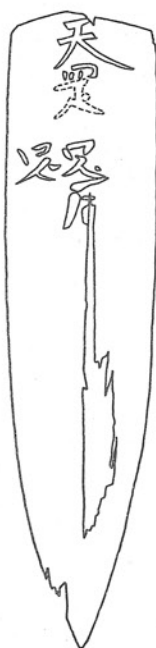
(栗野克己)



(2)



(1)



(3)